
九つの人九つの場を占めてベースボールの始まるとす

球磨

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

九つの人九つの場を占めてベースボールの始まらんとす

【NZコード】

N1850B

【作者名】

球麿

【あらすじ】

日本一のピッチャーになりたい。日本一のバッターになりたい。二人が選んだ道は違つたが、目指す場所は同じ。和也と拓真の球児物語。

あの田（龍齋也）

かなり下手な文だとおもひので、『氣合』を入れて読んで下さる。

あの日

「なあカズ、お前夢つてある?」

拓真が和也に聞いた。

それは塾の帰り道。月が空に輝いていて、周辺にはもう人影はない。

「…夢?」

「そう、夢。将来どうなりたいとか。何がある?」

いつもなら他の塾仲間も一緒に、今日はたまたま一人だけだった。二人は幼馴染みで仲も良いが、いつも二人以外にも誰かがいるので、一人だけというのは珍しかった。

「夢かあ。そうだな…俺、日本一のピッチャーになりたい。」

「日本一かあ。いいなそれ、お前が日本一のピッチャーなら、俺は日本一のバッターになるよ。」

中学野球全国大会の準決勝で負けてから3ヶ月が経っていた。

バッテリーの力は中学一だと言っていたが、結局日本一にはなれなかつた。

あの夏から3ヶ月が経ち、いつの間にか外は寒く、吐く息は白くなつていた。

「タクはやっぱ聖鈴行くのか?」

「おう。俺は絶対聖鈴学園に行く。あそこは名門だし、ここらじや甲子園に一番近い。お前も高校で野球するんだろ?なら一緒に聖鈴行こうぜ。俺らバッテリーが行つたら甲子園はまず間違いない。」

二人は小学生の頃からずっとバッテリーを組んでいて、拓真は和也のピッチングを認めていたし、和也もまた、拓真のキャッチング、バッティングを認めていた。

和也は

「ああ。そうだな。けど…」

と途中で話すのを止め、静かに一人微笑んでいた。拓真は和也の返

答の意味を考えているのか、黙っている。

その日の帰り道、二人はもう何も喋らなかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1850b/>

九つの人九つの場を占めてベースボールの始まるとす
2010年12月10日02時22分発行